

2024年度 卒業論文ポスターセッション 2024年3月24日

山上憶良「日本挽歌」論

国語国文学専修（国文学コース）村田ゼミ 文21-0380 瀬川史子

目次

- ① 考察対象作品の概要
- ② 研究の方法と流れ
- ③ 問題点の指摘
- ④ 第一反歌における転換
- ⑤ 長歌と反歌の相違
- ⑥ まとめ

論文構成

- 一 はじめに
- 二 漢詩文における話主の顕在化
- 三 長歌における話主の叱責
- 四 反歌にみる嘆きの外在化
- 五 おわりに

山上憶良「日本挽歌」論（瀬川）

考察対象作品の概要

日本挽歌一首

大王の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕ひ来まして 息だにも
いまだ休めず 年月も いまだあらねば 心ゆも 思はぬ間に うちなびき 臥やしめ
れ 言はむすべ せむすべ知らに 石木をも 問ひ放け知らず 家ならば かたちはあ
らむを 恨めしき 妹の命の 我をばも いかにせよとか にはほ鳥の 二人並び居 語
らひし 心背きて 家離りいます (5・七九四)

反歌

家に行きて いかにか我がせむ 枕づく つま屋さぶしく 思ほゆべしも (5・七九五)
はしきよし かくのみからに 慕ひ来し 妹が心の すべもすべなさ (5・七九六)
悔しかも かく知らませば あをによし 国内ことごと 見せましものを (5・七九七)
妹が見し 棟の花は 散りぬべし 我が泣く涙 いまだ干なくに (5・七九八)
大野山 霧立ち渡る 我が嘆く おきその風に 霧立ち渡る (5・七九九)

神亀五年七月廿一日、筑前国守山上憶良上る。

【概要】

- ・漢詩文(今回省略)が前に置かれている。
- ・妻を喪った夫の立場で詠まれた歌。
- ・神亀五年(七二八)に山上憶良が大伴旅人へ献上。
※当時、旅人は大宰帥として筑紫に赴任しており、その筑紫で妻を亡くした。
→憶良が旅人に代わって詠う歌。

研究の方法と流れ

●研究方法

考察する作品に用いられる語や表現が、奈良時代の文献ではどのような文脈で使われるか、どういう意味を示すのかを調べて（用例検索）、作品の分析をおこなう。

●研究の流れ

- 4月頃～ 先行研究の調査：考察する作品にどんな問題点が指摘されているか
訓詁註釈：作品の本文決定と作品表現の用例検索
- 9月頃～ 先行研究の再読：自身の調査・考察に基づき先行論をどう捉えるか
- 11月頃～ 卒論執筆
- 1月初め 卒論提出

問題点の指摘

●長反歌の関係を捉えた先行論

- 第一反歌から第三反歌まで、長歌と表現上で類似がみられ、長歌と「等質の感情」をうたうとされる。
- 第四反歌以降は長歌と異なる感情の表現をうたうとされる。

●長歌と第一反歌から第三反歌の感情表現

【長歌】～**恨めしき** 妹の命の 我をばも いかにかせよとか～

【第一反歌】家に行きて いかにか我がせむ 枕づく つま屋**さぶしく** 思ほゆべしも

【第二反歌】**はしきよし** かくのみからに 慕ひ来し 妹が心の すべもすべなさ

【第三反歌】**悔しかも** かく知らませば あをによし 国内ことごと 見せましものを

長歌と第一反歌から第三反歌までにうたわれる感情は「等質」といってよいのか。

第一反歌における転換

● 「家」への意識化

【第一反歌】 家に行きて いかにか我がせむ 枕づく つま屋さぶしく 思ほゆべしも

・ 山越しの 風を時じみ 寝る夜おちず 家なる妹を かけて偲ひつ (1・六)

・ 草枕 旅の紐解く 家の妹し 我を待ちかねて 嘆かすらしも

(12・三一四七)

→本来、妻は「家」にいるもので、旅先の夫が「家」の妻を想う歌の典型。

第一反歌は典型に則っているが、妻は「家」にはいない。

→ 「家」に意識を向けることで、**生前の妻を想起させる**ことになる。

長歌が筑紫で妻が亡くなったことに焦点化していたところから、夫の意識が「家」や生前の妻に移行している。

長歌と反歌の相違

● 「妹」の下向に関する描写と心情表現

【長歌前半】 しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕ひ来まして～

「うちなびき 臥やしぬれ」 = 妻の死去

下向の
捉え方
が変化

【長歌後半】 ～**恨めしき** 妹の命の . . . 語らひし 心背きて 家離りいます

【第二反歌】 **はしきよし** かくのみからに 慕ひ来し 妹が心の すべもすべなさ

・山川の そきへを遠み はしきよし 妹を相見ず かくや嘆かむ (17・三九六四)

① 「恨めしき」と妻を責める ⇔ 「はしきよし」と嘆息する

② 妻自身が進んで愛情を絶っていった行為とする

⇔ 妻の筑紫へ来たことを夫である自身に愛情がある故の行為とする

☆第一反歌で生前の妻を想起し、妻が自身に向けた愛情を思い出したと捉えられる。

長歌と反歌の相違

●第三反歌から第五反歌までの心情表現

【第三反歌】悔しかも かく知らませば あをによし 国内ことごと 見せましものを

・我が背子を いづち行かめと さき竹の そがひに寝しく 今し悔しも (7・一四一二)

・水鳥の 発ちの急ぎに 父母に 物言ず来にて 今ぞ悔しき (20・四三三七)

【第四反歌】妹が見し 棟の花は 散りぬべし 我が泣く涙 いまだ干なくに

【第五反歌】大野山 霧立ち渡る 我が嘆く おきその風に 霧立ち渡る

・君が行く 海辺の宿に 霧立たば 我が立ち嘆く 息と知りませ (15・三五八〇)

- ① 「恨めしき」以下に妻の行為を責める ⇔ 「悔しかも」と自分の行為を責める
 - ② 長歌から第三反歌まででない「涙」「嘆きの霧」など悲しみが形として現れる
- ☆「家」への意識化、愛情の想起をふまえ、後悔がうたわれ、悲嘆が具象化する。

まとめ

①長歌と第一反歌から第三反歌までの心情は「等質」とはいいがたい。

→筑紫から「家」へ焦点を向け、「恨めしき」から「はしきよし」「悔しかも」に、憤りから嘆息や後悔へと表出される感情に変化がある。

②第四反歌以降は長歌から第三反歌までにみられない「涙」「嘆き」があらわれる。

→長歌の「恨めしき」から、妻が自身に向けた愛情を想起し、夫自身の嘆息や後悔をふまえて、根底にあった夫の**悲嘆が顕著**になってゆく。

参考文献

- ・伊藤博氏 「家と旅 萬葉歌の一つの方法」(『リポート笠間』八号・一九七三年九月)
- ・伊藤博氏 「嘆きの霧—万葉贈答歌の一樣相—」(『森脇一夫博士古希記念論文集 万葉の発想』桜楓社・一九七七年五月/「抜け風の源流」の題で『万葉のいのち』所収)
- ・小川靖彦氏 「日本挽歌の反歌五首をめぐって」(『日本上代文学論集 稲岡耕二先生還暦記念』塙書房・一九九〇年四月)
- ・平館英子氏 「日本挽歌・反歌五首」(『萬葉歌の主題と意匠』塙書房・一九九八年八月)
- ・鉄野昌弘氏 「日本挽歌」(『セミナー万葉の歌人と作品 第五巻』和泉書院・二〇〇〇年九月)
- ・大島武宙氏 山上憶良「日本挽歌」長反歌の構成(『東京大学国文学論集』十六号・二〇二一年三月)